

# 南方アジア旅行雑感

水野弘元

## 一、はじめに

去年の六月ごろ、大学当局から、この学年度中にインド方面に視察見学の旅行に行かないかとのことで、文学部の佐々木宏幹助教授と同道することに決定された。いつ出かけるかははつきりしなかつたが、七月末にやっと具体化して、八月二十三日から約一ヶ月間と決定した。旅行社の最初の計画では、昔の西北インドにあたるガンダーラ地域を中心とするものであったが、せっかく行くからにはインドの仏跡やセイロンなどにも立ち寄りたいというので、これを追加することになった。

それにしても準備期間もなく、また駆け足旅行であるため、表面的な皮相な観察しか期待できない。そして自由行動できるために、公式訪問は一切せず、私的に見学することにした。一行は前半十人、後半の追加部分は残りの七人。ま

ず旅行の順序による日程の概略は次の如くである。

## 二、旅行日程(一)

八月二十三日（日曜）朝十時三十分に羽田空港を予定通りエア・フランス機で出発。大阪・ホンコン・プロンペン・バンコック経由で、一路インドのデリー空港へ直行。到着は夜の十時すぎであるが、日本とインドでは四時間の時差があるため、実際は十六時間要したことになる。

東南アジアやインド地方は雨期の終りごろで、ベトナムのブノンペン付近では、メコン河が氾濫して一面の海のようであつたし、インドや西パキスタンでも洪水の跡を見ることが多かった。そのために曇天なども多く、甚だしい暑熱は避けられたとしても、それでもいたるところで三十度以上の暑さに悩まされた。ただ宿舎では冷房装置のところが多くたから、睡眠を妨げられることはなかった。

八月二十四日（月曜）朝から自動車で首都デリー市内外の見物。午前中は官庁街の入口に建つてあるインド門からヤムナー河畔に出てガンジーの墓を訪れ、次いでデリー大学、レッドフォート（赤い城）、バザール（市場）、イスラム寺院ジヤマ・マスジット等の見学。午後一時間ほどの夕立が止み、三時すぎからクツブ・ミナール（勝利の塔）、国會議事堂、諸官庁街、商店街等を通観。この日はクリシュナという伝説的なインド第一の英雄の生誕日とされ、クリシュナデーとして国家的祝祭日であり、大学も官庁も休日となっている。

夕方はビルラ・テンプルに参詣。この壮大なヒンズー寺院

の一部にクリシュナを祀つてあるため、寺院全体が多彩なイルミネーションに照らされ、参拝客で大賑い。

八月二十五日（火曜）朝七時ニューデリー駅から特急観光列車で南方のアグラ行き。世界的に有名なタジ・マハール（ムガール王朝シャージャハン帝の皇后の墓）、アグラフォート等を見学し、おそい昼食の後、自動車で四〇キロほど北方のマツラーへ向かう。ここは旅行日程になかったが、無理をして変更してもらった。マツラーの仏教美術を見るためである。ギリシア風のガンダーラ美術と前後して、インド固有の仏像類がここに制作されたのである。

マツラーへの途中でアクバル大帝の墓に立ち寄り、マツラー博物館についたのは閉館間近い四時半。少し時間を延ばし

てもらつて急ぎ観覧。有名なカニシカ王の首なしの像もここに展覧されている。美術品が多すぎて十分に見られなかつたのは残念である。ここを出てこの町にあるクリシュナ誕生寺に参詣。このヒンズー寺院も昨日からのクリシュナデーのために参詣客が多い。この寺は一時イスラムに占領されたが、今では両宗教の寺が併存している。特急列車にマツラー駅で乗り込み、夜の十時すぎニューデリーに帰る。

八月二十六日（水曜）雨のため飛行機延着。朝九時四十分、デリー空港を出発し、十一時に西方のアムリツアール空港着。自動車でこの町にあるシク教の本山黄金寺を見学。バザールを通つて、西方の西パキスタンとの国境に至る。（広漠たる平野で緑の稻田が続く穀倉地帯。昨日のアグラ方面の乾燥した平原とはかなり違う）インドとパキスタンの間には近年紛争が続き、とくにこの国境を越えた西パキスタンのラホール近郊では激しい戦闘が繰りひろげられ、その爪跡は生々しく今に残つてゐる。このため両国の国境では警戒が厳重で、両方側の検閲に四時間近くもかかり、ラホールのホテルに着いたのは夕方七時すぎであった。ここはインドより三十分の時差。

八月二十七日（木曜）ラホールの町には直径一メートル近くもあるかと思われる大きな街路樹が立ち並び——これは主としてピッバル樹（菩提樹）——、掃除も行き届き、インドの

都市よりも清潔に感ぜられる。朝九時から市内外の見学。ラホール博物館、ここは英領時代から有名であり、ガンダーラ美術をはじめ、近年発掘されたインダス文明の発掘物にいたるまで、極めて多彩な美術品が展覧され、短時間では到底見られない。博物館を辞して、向側にあるパンジャップ大学の美術学部訪問。午後はラホール城、世界最大のイスラム大寺院バドシャヒ・モスク、郊外にあるシャリマール庭園。これも極めて壮大で美しい。概してイスラムの城郭や寺院は日本では想像もつかないほど大きく、大理石・宝石類・金銀等で飾られた建物も多く、すべては幾何学的に整然と美しく造られている。

八月二十八日（金曜）十二時にラホール空港から西方のラワルピンディまで一時間近く飛び、四時から車でこの町と近くに新しく建設されているパキスタンの首都イスラマバードを見学。この町はまだ都市計画による建設途上にあって、現在は人口二十万。この日は金曜でイスラム諸国の安息日（日曜）の休日で官庁、外国大使館等も閉館。三十七・八度の暑熱で、夜半でも三十度を越して不快。ラワルピンディ泊り。

八月二十九日（土曜）車で北方の遺跡タキシラ（旧名Takṣaśilā 祀尊時代には文化の一中心地）見学。午前中はタキシラの考古学博物館（陳列品の数は少ないがこの地方発掘

のガンダーラ美術品等が収められている。第一の古都ビルマウンド（ペルシア時代）、第二の都シリカップ（マウリア王朝から以後）、第三の都シルスク（クシャーナ王朝時代）の遺跡。午後はタキシラ地域にあるジュリアンおよびモーラ・モラヴの仏教寺院跡の見学。前者は小高い山の頂上に、後者は山の中腹にあり、ともに塔院と僧院の両者から成り、この地方に栄えていた仏教寺院の姿を知ることができる。この日も三十数度の暑熱であり、炎天下を徒步で歩くことが多く、前日来の疲労が甚だしい。ラワルピンディ泊り。

八月三十日（日曜）早朝六時すぎ、ラワルピンディ空港から北方ヒマラヤ山系の渓谷にあるギルギット空港に八時まえ到着。ここは昔はカシュミールの北の関門とされていたが、インド、パキスタンの独立以後は、はじめからカシュミールと離れて、パキスタン領となり、この地域の郡長の支配下にある。ここはインダス河上流に近く、朝晩は涼しいが日中は三十度を越すこともある。しかしそが国の軽井沢にも似て、避暑地となっているだけに、大変凌ぎよく、冷房の必要はない。前日来の疲労をいやすため休憩。夕方はバザール見学。小さな貧しい純朴な田舎町である。

ギルギット近郊からは、四十年前に、多量の大小乘の梵文仏典の写本が発見された。六・七世紀のものと推察され、旧インド領内で発見された写本としては唯一のものとい

える。その多くはすでに整理出版されている。この地方の人々はアーリアン系、モンゴル系などが混合しているが、現在ではすべてイスラム教徒であつて仏教はまったく残存しない。梵文仏典写本の発見も戦前のことであり、宗教も違うために、発見のことやその場所についても知る人がいないらしい。また筆者は前日来の疲労や日射病のため、それに飲み水が悪く食事が変っているため、激しい下痢をして、動けなくなってしまった。

八月三十一日（月曜）、九月一日（火曜）、九月二日（水曜）この間天候不順で飛行機がやつて来ず、足止めをくつた。他の連中はそれぞれ付近に見学に行つたが、筆者は絶食して下痢治療に専念した。疲労のためかなかなか治らず、このまま帰国せざるを得ないかとも思い、周囲の人たちも心配してくれたが、涼しい山間に静養したおかげで、元気はかなり回復した。

九月三日（木曜）久しぶりの晴天で待ちに待つた飛行機がやつて來た。朝八時すぎギルギット出発、九時半ラワルピンディ着。ギルギットに二日も余分に足止めされたために、それだけ予定が狂い、これから見学するスワット地方のガンダーラ美術を中心とする遺跡や遺物を簡略にせざるを得なくなつた。

ガンダーラ美術の中心は東方のタキシラと西方のスワット

方面である。スワットは盆地になつていて気候風土もよく、この周辺にはタキシラとは比較にならないほどの多くの仏教遺跡があるが、今はその一部分しか訪ねられない。

朝十時にラワルピンディから車で北方のスワットに向かう。スワットへの入口は峻峻な山や峠であるが、ここを九十九折の舗装道路をすぎると平坦なスワット盆地に出る。稻がよく実り、その他の農作物が多く、わが国の阿蘇外輪山中の阿蘇盆地を思わせる。ラワルピンディやタキシラ以来の行く先々はほとんど乾燥地であり、またギルギットへの往復の飛行機中で眺められる数百キロに及ぶ山岳地帯も、眼のとどくかぎり、一木一草もない乾き切つた山々が重なり合い、峡谷地帯にわずかの緑があるにすぎない。法顯や玄奘、または慧生・宋雲の旅行記にあるような峻嶮の難路がこの地方にもあつたことと、昔の天竺求法僧たちの苦難がしのばれる。乾燥地域はこれから先きのアフガニスタンの諸地方でも同じようを見られる。

これに反してスワット盆地だけは水が豊富で、清冽な泉も諸所に涌き出で、まるで別天地の感じがする。丘陵地帯にはいたる所に僧院の遺趾やアショーカ王の仏舎利塔の残骸や摩崖仏などが見られる。スワット博物館にはこの地方出土のガンダーラ美術を蔵しているが、蒐集品はラホールやペシャワールの博物館には遠く及ばない。十年ほど前にイタリアのト

ウッチ教授が発掘したブトカラの一大仏塔跡には、その周囲に数百の小塔跡がギッシリ並んでいる。夕方おそらくスワットホテルに到着宿泊。

九月四日（金曜）アショーカ王の摩崖法勅があるシャーバーズガリーもここから遠くない所にあるが、行く暇もなく、また予定にも入っていなかった。スワット盆地を下って、途中で左方の山の中腹にあるタクト・イ・バハイの大僧院跡を見学する。ここでは塔院よりも僧院が極めて宏大であり、また付近の山々にも小僧房の跡が多く、昔はここに数百数千の僧侶が止住して、修行や学問や著述に励んだものであろう。

ここをさらに南下するとペシャワールに着く。昔のガンダーラ国の首都プルシャプラ（Purusa-pura）の跡である。この町は千年以上にもわたつて仏教の大中心地をなし、脇・馬鳴・法救・如意・世親等の高僧の活躍したところである。有名なカニシカ大塔の跡もあるが、行く暇がなかつた。三時ごろからペシャワール博物館見学。ここにはガンダーラ仏像の逸品が陳列され、カニシカ大塔跡から発掘された黄金の舍利瓶も所蔵されている。ラホール博物館とともに、ガンダーラ美術の研究のための重要な宝庫となつてゐる。夕方はバザールや町の中のイスラム寺院（モスク）のタベの祈りを見学する。ペシャワール泊り。

九月五日（土曜）飛行機の都合で午後一時半にペシャワー

ル飛行場から一時間ほどで、アフガニスタンの首都カブール着。ここはパキスタンとは三十分の時差。この町は一般には西洋流にカブールと呼ばれるが、カーブルが正しいらしい。

四時ごろから専用バスで市内見物。アフガニスタンはインドやパキスタンと違つて立憲君主国である。郊外の小高い丘の上に前王の墓があつて、全市が見渡される。それからムガール王朝第一代ファーブル王の墓、新市街、学校街などを通り、旧王宮に設けられているレストランで休憩し、夕景を楽しむ。

カブールの町はインドの都市よりも清潔であり、西パキスタンの都市よりも西洋に近い感じがする。パキスタンでは婦人はチャドルを着けて顔を覆うているが、カブールでは近代的な西洋風の服装が多く、男子も背広姿がかなりある。またここには西洋人の避暑や観光の客も多い。インドやパキスタンでは、車は日本のように左側通行であるが、アフガニスタンではアメリカのように右側通行に変る。階級制度なども西に来るほど目立たなくなつて来る。インドに極めて多く、パキスタンにも多少見られる乞食や押し売りはここでは全くない。ここは海拔六千フィートの高地にあるが、乾燥しているためか、三十度を越してもそれほど熱く感じない。一つには熱さになれたせいかも知れない。下痢も漸やく回復しかける。

この土地には古いものと新しいものが同居している。町はずれの乾燥しきつた農地には、遊牧の群民がテントを張つていて市民に家畜を食料として供給し、必需物資と交換して生活している。やがて山岳地帯に帰り行くであろう。来春は春草を追つて家畜を成育させ、かれらを連れて再びこの町に下つて来るであろう。

九月六日（日曜）朝八時四十分、カブール飛行場から一時間近くで北方のバーミアン到着。ここは八千フィート以上の高さにある盆地的渓谷の乾燥地帯で、その周辺にある丘陵地の軟い岩石を刻んで造られた百五・六十メートルの巨大な仏像で有名な場所である。造建当初は極彩色を施した黄金仏であつたらしいが、今ではガンダーラやインド各地で見られるよう、仏の顔や手など破壊されている。この第二の大仏は前年から国家の手で修理中であり、第一の大仏は後方の岩山からの孔道の通路があつて、仏頭の上に出られるようになっている。その天井の岩には美しい壁画の跡が見られる。この二体の大仏のほかに、小さな仏龕や僧房が丘陵壁のいたる所に掘り込まれており、仏教が栄えていた往時がしのばれる。小高い丘の仏寺の跡が後で要塞となつたものもある。この町はシルクロードの一要地でインドへ向かう関門となつていた。夕方カブールに帰る。

九月七日（月曜）午前中はイギリスの中央アジア大探險家

スタインの墓を訪れ、カブール博物館を見学。ここにはアフガニスタン領内からのガンダーラ美術品や仏教遺跡の写真などが陳列されている。クシャーナ王朝時代にはこの地方にも仏教が大いに栄えていたらしく、ハッダその他の仏教遺跡が発掘され、アショーカ王の仏舎利塔も諸所にあるらしい。アラム語やギリシア語で刻まれたアショーカの法勅文が発見されたのもこの国の南方地方である。仏教遺跡の発掘研究などもまだ十分に行なわれていない。午後は買物など。

九月八日（火曜）自動車でカブールを出発してパキスタンへ下る。この通路は峻岨な峡谷や峠から成つていて、今は舗装されて車を飛ばすのも快適である。国境に至るまでの峨峨たる山嶮はアメリカ、西ドイツの経済援助で、山をくり抜いて平坦な道路となし、ダムや発電所が作られている。ソ連も別に大きなダム湖や灌漑のための水路を造り七千ヘクタールの沙漠が緑の農地となつて、多くの穀物や果樹が栽培されるようになった。日本でも農業技術やダム湖での養魚を指導しているとのこと。

国境をすぎてパキスタンに入ると、カイバル峠を越えて、パンジャブ平原に出るのであるが、峠の山腹にはあちこちでアショーカ王の仏舎利塔の残骸が見られる。索漠たる峠を下れば広漠たる平原が眼前に開け、遠方は霞んで大海洋かとまがう程である。草木の緑も次第に多くなり、農地や街路樹も青

々と茂っている。とくにペシャワール入ると森の町の感じである。以上で旅行社の最初の計画は終了。

九月九日（水曜）いよいよ帰途である。朝八時すぎ、ペシャワール空港からラワルピンディ、ラホールを経由し、十二時にインダス河口に近いアラビア海沿岸のカラチ空港に着く。カラチでは小雨。昨日の大雨で道路が水没しているところがある。最初の旅行計画だけに参加した三人は夜半に宿を出て帰国の途につく。カラチ泊り。

九月十日（木曜）十時ごろから市内見物。水族館、海岸遊園地、博物館など。新しいながらこの博物館にもガンダーラ美術品もかなりあり、インダス文明の発掘品、パキスタンの諸民族の風俗、イスラム文化等を展覧している。午後は休養。

### 三、旅行日程(二)

九月十一日（金曜）これから後半の旅行日程に入る。朝九時すぎカラチ空港を出発し、セイロンのコロンボ国際空港まで一飛び。三時間余で十二時すぎに到着。西パキスタンとは三十分の時差。車でセイロン島西海岸に沿って北上、古都アヌラーダプラに向かうが、雨のために路が崩れて通れず、引き返し迂回して夜の十一時すぎにアヌラーダ着。雨天のためか日中も温度三十度を越えず、夕方の車中は寒ささえ覚え

る。セイロン島は赤道に近いが、海岸にあるためか、今までの旅行中ではもつとも涼しい。また全島が緑に覆われて美しい、同じく仏教徒の国であるという気持ちからか、親しさと安堵感を覚える。

九月十二日（土曜）昨日の迂回をわざで半日を空費し、午前中はアヌラーダプラの遺跡廻り。セイロン最初の寺としてのイスルムニヤ寺、塔寺(*Thūpārāma*)の大塔、無畏山寺塔、祇陀林寺塔、銅殿跡、大寺派本山の大寺(*Mahāvihāra*)、大菩提樹等を参拝參觀。この古都全体が美しい公園のようである。

ここから南下して第三の古都カンディーに着いたのが二時。ここはセイロン島の中央で海拔千数百フィートの高地にあるため、常に気候温和で住み易いらしい。樹木は鬱蒼として草木の花は咲き乱れ、まるで天下の楽園である。まず有名な仏歯寺に参拝。ここを下つて近くのペラデニヤにある植物園を見学、ここには多くの珍らしい樹木や草花の類が集められていて美しい。隣りの国立セイロン大学は素通りしただけで、首都コロンボに急ぐ。途中で日は暮れ、八時に宿舎に到着し、外出も買物もできない。予定が狂ったため、コロンボの博物館、寺院、大学、書肆等へはまったく訪ねられない。セイロンにはせめて四・五日でも滞在したいが、残念至極。

九月十三日（日曜）コロンボ小空港を九時すぎ出発、一時

間ほどで南インドのマドラス空港着。晴天で三十五度の暑熱。二時すぎからマドラス博物館を見学。ここには南方インドのアマラワティー、ナーガルジュニコンダ等に關係ある仏教遺品が陳列されていることを後で聞いて、日曜のことと何ともならず、残念であった。それから南方海岸マハパリプラムにあるヒンズー教の岩石寺院跡、その他の古い石造の建築物や彫刻等を見学。日曜のためか一般観光客も多く、物乞いや押し売りにせめられて閉口した。セイロンの涼しく静かで清く美しいのと対照的。しかしそのタミール人はマド拉斯地方から移住したものらしく、タミール語、文字、男子の服装など、両者が共通している点も多い。

九月十四日（月曜）朝八時すぎマドラス空港発、十一時すぎカルカッタ飛行場へ到着。それからカルカッタ市内見物。

カルカッタという名称の起原となつたカーリ寺、有名なジャイナ教寺院等へ参詣。急いで飛行場へ行つたが、悪天候のためベナレス行きの飛行機は欠航し、初転法輪の鹿野苑やベナレスの訪問は断念せざるを得ない。仕方なく夕方宿に帰る。

九月十五日（火曜）朝七時まえにカルカッタ空港発、パトナ空港へ八時四十分に到着。宿で休憩後、午後はパトナ市内見物。石造の穀倉の遺物、博物館を訪問する。ここにはこの付近で発見された仏教、ヒンズー教、ジャイナ教の美術品（それはグプタ時代やペーラ王朝時代のもの）やチベット仏

教関係の仏像・絵画等が数多く展示されている。郊外にマウリア王朝時代の宮殿跡が発掘されていて、宮殿の大きな石柱があり、発掘物も展示されている。ここで激しい驟雨があり、ここからさらに東方にある有名なシク教寺院を参觀參詣。パトナ泊り。

九月十六日（水曜）朝八時すぎに自動車でパトナ出発。途中満水のガンジス河畔や稻田の平原を通り、ナーランダ着。ここは数百年にわたってインド仏教教学の中心地であったナーランダ大寺院（大学）のあつた場所で、現在はこの大寺院の一部分が発掘されて公園のように美しく整備され、国家で管理されている。インドやパキスタンでは、有名な歴史上の遺跡や博物館などは国家で管理されて、入場料も取らない場合が多い。

ナーランダ大寺の付近にある州立の大学院ペーリ研究所にも立ち寄つたが時間がなくてゆっくりできない。ここには東洋諸国から仏教研究者が留学し、わが国からも在籍していた若い学者が何人かある。ここを辞去してラージギル（昔のRājagahaすなわち王舎城）入口に近いレストハウスに着いたのが二時すぎ。昼食後三時すぎから王舎城趾に向かう。

王舎城は釈尊時代のマガダ国の首都であり、五つの山に囲まれた要害の地で、釈尊に因んだ仏教遺跡も少なくない。この城市はあまり広くなく、今では大部分が林野となつてい

る。有名な靈鷲山に連なつて、かなり高い多宝山(Ratnagiri)がある。この山頂にその前年秋に日本山妙法寺で建てた白聖の仏舎利塔が聳えている。嶮しい山で登山が困難であるため、山上までリフトが設けられている。この山頂からは王舎城趾だけでなく、付近一帯がよく眺められる。

休憩の後、塔守の八木師の案内で、近くにある靈鷲山まで、嶮しい道もないような山路を歩いて下り、靈鷲山では釈尊の昔をしのび、感慨無量なるものがあつた。やがて夕暮がせまり、帰途には有名な温泉寺に立ち寄つた。今ではヒンズー教に属するが、釈尊や弟子たちはここで入湯治療などをしたことが、原始経典にしばしば出ている。

九月十七日（木曜）朝八時レストハウスを出発。まず王舎城の北の入口に近い日本山妙法寺を訪問する。それから竹林精舍跡、その他の遺跡を観光。第一結集のあつた七葉窟は毘布羅山の麓にあって車も行かない不便らしく、時間がなくて訪ねることができなかつた。南門城壁のあつたところから王舎城を出て車を走らせる。ガヤを通つてブッダガヤに行くためである。ペトナ以来、この辺一帯は大平原が連なり、田植のすんだところやすまないところがあつて、豊かな穀倉地帯を思わせる。この日は工巧神ヴィシュバカルマンの祭日(Viśvakarma-pūjā)で、農村の人々は着飾つてお祭りに参加していた。

十二時まえにブッダガヤに着き、その下で釈尊が成道された菩提樹を拝み、その東側に建てられている大塔を一巡し、塔内に入つて、仏前において、一同で般若心経を読誦したが万感胸にせまる感激であつた。今回の旅行では仏の靈跡を訪ねるのはここだけであるが、仏教発祥の地として、ここが最尊最重の記念所である。近くにある小さな新しい博物館には、付近から発見された仏像彫刻類を展示している。大塔の近くにはチベット寺院、セイロン寺院、タイ・ビルマ・中国等の寺院がそれぞれあり、日本の寺院も建設中である。五世紀のころ、セイロンはここに大覺寺(Mahābodhi-vihāra 大菩提精舍)を建て、その後この寺はセイロンはじめ諸外国の求法僧が仏跡参拝等のために止宿する根拠地になつていて。百年ほど前に大塔が発掘（イスラムの攻撃を避けるため、または尼連禪河の氾濫のため、この土地はかなり土砂に埋もれ、ヒンズー教徒がこれを守つていた）され、昔の大覺寺をしのんで、セイロン人ダルマ・パーラは大菩提会(Mahābodhi Society)を設立し、その近くにセイロン寺が建てられた。諸国の寺院の中ではチベットの寺がもっとも大きく、ダライラーマも常にはこの寺に止住の由。その日は旅行中で不在であった。

おそい昼食の後には近くの尼連禪河畔に行つて昔をしのび、大塔周辺で自由時間をすごした。やがてガヤ空港にて待機したが、飛行機はなかなか来ず、一時は帰れないでの

はないかと心配した。漸やく六時にやって来たので、その日の中にカルカッタに戻ることができた。

九月十八日（金曜）いよいよインドを去る日である。午前中は買物とカルカッタ博物館の訪問。ここはインド、パキスタンを通じて最大の博物館であつて、一般の多くの展示物のほかに、仏教の遺物・遺品等も豊富に集められていて、丹念に見物するためにはここだけでも数日を要するであろう。

今は時間がないので簡単にすませて空港へ急いだ。二時すぎに満員のカンタス機に乗り、夕方六時ごろバンコック到着。オーストラリアのこの飛行機には西洋人の乗客が多く、数日前のハイジャック事件のためか、すべての荷物を預けさせ、手廻り品だけをビニールの袋に入れて持ち込ませるという厳重な警戒ぶりであった。しかも西洋人には適用せず、有色人種だけビニール袋を持たせるというような差別待遇には不快な屈辱感を禁ずることができなかつた。

九月十九日（土曜）旅行の最後の日である。朝七時ごろからバンコック市内見物。小舟に乗つてメナム河を下り、水上の生活、朝の市場、観光場所などを廻り、有名な暁の寺（ワット・アルン）に立ち寄つて参拝見物。エメラルド仏が祀つてある王宮寺院には曜日がわるく参拝できなかつた。

タイの気候は、この時期ではインドやペキスタンよりも涼しい。それに樹木は青々と茂り、仏教信仰や人種的親近性の

ためか、今まで通つて來たどの地方よりも親しみが感ぜられる。文化の程度も高く、経済的にも恵まれているように見える。「乞食や押し売りもいないので気持よく見物である。」

二時すぎ、バンコック空港からインド航空機で香港経由で羽田に着いたのは夜の十二時を三十分もすぎていた。

#### 四、諸宗教の感想〔 ヒンズー教と仏教〕

今回の旅行中、宗教として接したのはヒンズー教、イスラム教、シク教、ジャイナ教、仏教等であり、寺院や信徒などを見聞するに、日本の仏教と比較して大いに違つてゐる点もあり、他山の石として参考すべきものも少なくなかつた。もとより短時間の接触で、誤つた観察や皮相な見方もあるかも知れないが、とにかく印象を受けた点の一部を紹介することにしたい。

ヒンズー教はインド連合の人口の過半数によつて信奉されているであろうが、今回の旅行はインド内地が少なかつたため、ヒンズー教については広い深い経験をもつことはできなかつた。民衆的なお祭りとしては八月二十四日のクリシュナデー（Krishna Day）と九月十七日の工巧神祭（Visvakarma-pūjā）があつた。これら国民的なお祭りは、一年を通じては数多くあることであろう。わが国で昔から、神道による

いろいろなお祭りがあつたり、仏教の法会の諸行事があつたりするのと同じであろう。

インド人に国民的英雄として親しまれているクリシュナのお祭りは、前の旅行日程の八月二十四日のビルラ寺における盛大な祭典と、翌日のクリシュナ誕生寺における祭礼として見ることができた。

ビルラ寺では、夕方には夕闇の中に、大きな堂屋上に多彩のイルミネーションを照らし、広い境内は老若男女の参詣人で一杯である。自動車で来るもの、馬車や輪タクを用いるもの、乗馬によるものがあり、多くは歩行によるものである。婦女子などはいずれも晴れ着を美しく着飾っている。お寺の堂内へは長い廊下や階段を通つて参拝者の列が続々、クリシユナ像の前ではお経（バガバット・ギーターカ）を声高く読誦している人々もある。

堂の内外を問わず、暗がりであつても参詣者は静肅であり、喧嘩口論やスリ・タカリなどは見られず、みだらな行動もないようである。インドでは飲酒を禁じ、ヒンズー教徒は不飲酒戒を守つてゐるために、泥酔などによる刑罰上や風紀上の問題が起らぬいためであろう。

その翌日、マツラーのクリシュナ寺においては、前日に引き続いて信者たちの参詣が絶えなかつた。遠方から食料持参で、馬車などに乗つて家族連れて、泊りがけでくる者もある

らしい。ここでも堂に籠つてお経を合誦してゐる者がある。この寺はアクバル大帝の時かに、イスラム教に奪われて、大きなモスクが建てられていたが、今日ではヒンズー教のクリシュナ寺も復活され、両教徒がそれ各自のお堂に参拝して、問題も起らぬようである。イスラム教徒も着飾つてモスクにお参りしているが、堂前の広場で、夜おそくまで催されるクリシュナ物語の芝居は、両教徒が仲よく見物して楽しむものと思われる。

工巧神ヴィシュバカルマンのお祭りは、ガヤ地方の農村でも、カルカッタの都会でもこれを見た。市街地のお祭りは東京の神田祭りなどのように、町の民家に祭壇を飾つて人々が祝い祭つてゐる。農村では神社または民家の臨時の祭場で美しい神像を祀り、付近の農民たちが一家揃つて食料を持ち、着飾つて嬉々として集つてくる。中には小山羊を牽いてくる人たちもいる。山羊は犠牲として殺され、祭壇に供えられるという昔からの風習のためである。筆者らは車で通り、民家に設けられている祭場を訪れたにすぎず、まだ早い時間のため、山羊が殺される場面を見なかつたが、山羊は自分の運命を予知してか、いやがるのを無理やりに引っ張つて行くのは可哀想であった。犠牲祭だけは仏教や神道などに見られない点である。

仏教から見れば、ヒンズー教には犠牲祭やカースト制など

の不合理な迷信があつて、これを外道と見なすけれども、ヒンズー教では仏教を異教とは見ていない。ニューデリーのビルラ寺には、主神としてはヒンズー教ヴィシュヌ派のヴィシ

ュヌ神やシバ派のシバ神などが中央に祀られているが、右翼には英雄神クリシュナが、左翼には仏教の釈尊が祀られている。ヒンズー教によれば釈尊もクリシュナと同じく主神ヴィシュヌの一権化であるとされ、仏教はヒンズー教の分派と見られている。従つてビルラ寺ではヒンズー教徒で釈尊の像にお参りする者も少なくない。

同じような経験はブッダガヤにおける菩提樹や釈尊の像に対するヒンズー教徒の崇拜にも見られた。筆者らがブッダガヤに行つたのは九月十七日であるが、大塔の付近は数百のインド人參拜者で混雜していた。聞けばかれらはヒンズー教徒であつて、インド諸地方から泊りがけでやってきている農民たちであった。引率者は土地のバラモンであるらしく、かれらが毎年団体をなして參拜するのは、ヒンズー教の聖地ベナレスに巡拝するのに似ている。とくに過去一年間に家族を亡くした者はかならず參拝し、かれらは頭上のチューラ（数本の小髪）を除いて髪を短かくし、他の者はチューラなしの坊主頭である。この巡拝者たちは二週間この地に滞在して毎日大塔にお参りし、祖先の冥福のために十七箇の團子を作つて仏に供える。今が田植えを終えた農閑期でもあるであろう。

形式的にしろ、敬虔で熱心な信仰がヒンズー教徒たちの間に保持されていることを示すものである。

## 五、諸宗教の感想(二)

### イスラム教とシク教

今日のインド国内にもかなりのイスラム教徒があり、またイスラムの遺跡も少くない。しかし主としてパキスタンがイスラム教国であり、ここではイスラム教がもつとも優勢を占めている。またアフガニスタンも人口の大部分はイスラム教徒である。イスラムには宏壮な城郭・宮殿・寺院・墳墓などが諸地方に見られる。城郭としてはデリーのレッドフォート、アグラのアグラフォート、ラホールのラホールフォートなど代表的なものを見学し、寺院すなわちモスクにはデリーのジャマ・マスジット、ラホールのバドシャヒ・マスジットなどがあり、墳墓としてはアグラのタージマハール、付近にあるイティマド・ウド・ダウラハ（ジャハーン女帝の父母の墓）、シカンドラ（アクバル大帝の墓）、カブールにあるムガル朝初代の墓などを見学した。いずれも贅沢をつくしたすばらしいものである。

モスクについて気付くことは、礼拝する正面がかならずメツカに向けて造られているということである。これは信者の墓でも土葬される死骸の顔がかならずメツカの方角に向けら

れるという。モスクは一時に何千、何万の人を収容できるものもあり、広々とした煉瓦や石畳みの広場があり、前面には指導者層のための屋根のある一段高い壇場が設けられている。しかしこの壇場には神像その他礼拝の対象となるものは何もなく、モスク全体がガランとしている。沐浴して一日に五回聖地メッカの方角に礼拝すればそれでよいか、モスクの中には礼拝の対象を必要としない。したがつてモスクでは神を冒瀆したり、神に不敬をなしたりすることもない。

この点が神仏の像を祀っている仏教・ヒンズー教・ジャイナ教などの寺院と違うところである。偶像破壊を主義とするイスラム教では、神仏の像は発見次第これを破壊していく。仏教寺院の仏像等がほとんど破壊されて、完全なもののがインド方面に少ないので、イスラムによる被害と思われる。

イスラム教の人たちは、かれらの侵入以前にすでにサカ族や匈奴族等によつて仏像は破壊されていたといつてゐるが、インド・パキスタン・アフガニスタン全域にわたるあれほど徹底した破壊は前に侵入した少数のサカ族たちによつては行なわれ得なかつたであろう。

それはとにかくとして、イスラム寺院の簡素さと仏教寺院の仏像や仏塔の所狭いまでの雑居には、いかなる長所や短所があるであろうか。ガンダーラ地方には諸処に仏教寺院跡があり、多くは塔院と僧院から成つてゐるが、塔院だけのもの

もある。これらの塔院について見るに、中央に大きな塔がある。この主塔も最初はアショーカ王が建造したあまり大きくないものであつたが、時代とともに篤信者によつて、その周囲が何回にもわたつて拡大され、今日見るような大きなものとなつてゐる。カイベル峠の山腹で見られるような仏舎利塔の残骸は拡大されないものであり、サーンチの仏塔、ブッダガヤの大塔、サールナート（鹿野苑）のダメーク塔などは拡大されたものである。

拡大されたものでも単独にあれば、その偉容をほこり、信仰の対象としても單一で力強いであらう。このような大塔の遺跡もスワットには見られた。ところがガンダーラ地方の拡大された大塔の周囲には無数の小塔が立ち並んでゐる場合が多い。そのもつとも著しい例はトウッヂ教授が発掘したブトカラの大塔跡である。ここには一・二メートル四方の方形の数百の小塔群が主塔の周囲に所狭きまでに建てられてゐる。またブッダガヤの大塔の周囲や屋上などには大小無数の小塔群が林立している。この小塔はガンダーラ地方のように小さな石片を積み重ねたものでなく、单一の堅い石で造られた立派なものであり、しかも泥に没してイスラムに見られなかつたためか、全く被害を受けていない。

さらに仏塔とならんで、ガンダーラ地方には石造や塑造などのおびただしい大小の仏菩薩の像があり、しかもそれが破

壊されて残骸の山となっているところもある。これはインドにも同様であったと思われるが、今では寺院跡もなく、仏像は運び去られているから不明である。しかしマガダ地方からはグプタ期やペーラ期の仏像が多く発見されているから、ガンダーラ地方と異ならなかつたであろう。ジャワのボロボドウルにおける数百の仏像も類似のものである。

それではこれらの仏塔や仏像はどうして多く造られたかといえば、すべて信者の寄進によるものである。何のために寄進するかといえば、法華經、造塔功德經、大乘造像功德經、造立形像福報經などによれば、小乗ではよい環境や境遇などの世間的福樂を得るために、大乗ではその他に極樂に生まれるとか、仏道を成すとか、衆生を救済するとかを願うためであるとされる。

ところが舍利塔や仏像のような信仰の対象が、主塔や主仏の周囲に所狭きまでに立ち並ぶと、場所が取られて混雜するだけでなく、信仰の対象が分散して、主塔・主仏への敬虔の念や純粹さが薄れ弱められる危惧があり、群小の仏塔や仏像に対しても不敬のことさえも起こりかねない。これでは仏塔や仏像を冒瀆することになる。これらの寄進者は誠心をもつて奉獻したとしても、却つて他に迷惑を及ぼすことにもなる。ことに自分の世間的福樂を願つて寄進するが如きは自利のために他を顧みない行為であつて、仏教の精神に反するといわなければならない。

イスラム教の寺院には信仰の対象が置かれていなかから、他から被害を受けることもなく、自ら不敬を犯すこともなく、広々としてスッキリしている。仏教寺院では信仰対象はこれを必要とするとしても、本当の仏舍利を収めた仏塔なり、すばらしい仏像なりが、单一の形で祀られておればそれでよいであろう。仏塔や仏像が多く造られることの不都合はそこにある。ビルマのマンダレー等に林立する多くのパゴダ、中国や日本で多くの造像活動や百万塔が作られたことについても、国じことがいえるかも知れない。

次にイスラム教では複雑な教理や哲学はなく、コーランの簡単な語句を唱えて、一日五回の礼拝と戒律を守るという簡素さをもつており、しかもその教えがよく守られている。かつて仏教が優勢であったパキスタンやアフガニスタンなどが、今ではほとんどイスラム教に代わられている理由は、いろいろあるであろうが、イスラム教の簡易な教えと熱心な信仰が重要なものであると思われる。

パキスタンでは、公器であるパキスタン・タイムズという英字新聞に、おそらく政府の方針としてであろうが、毎週のことかどうか知らないが、金曜日には二頁全面にイスラム教の宣伝をしている。日本では考えられないことである。これは国内向けのほかに、外国人に対してイスラム教の教理や実

情を知らせるという面もあるであろう。八月二十八日（金曜）のイスラム航空の機上で配られたパキスタン・タイムズには右のイスラム教版が含まれていた。

次にはシク教について。この宗教は十六世紀初頭にパンジャーブ地方で創立されたものである。教祖はヒンズー教徒でありながら、ヒンズー教の欠点としてのカースト制や偶像崇拜や苦行の習慣などを廃し、イスラム教の長所を取り入れて、在家生活のままでなされる簡素で熱心な信仰を鼓吹した。アムリツツアールにあるシク教本山やパトナの同教寺院では、

信者や未信者を問わず参拝することを歓迎し、すべての人に対し親切でなき深く、無料接待所や無料宿泊所を設けている。宝物拝観や案内説明なども無料で喜んでなされ、信仰の世界には世間的な利害損得の念は一切持ち込まれていないようである。その代り寺院の維持経営や接待宿泊の費用などは財力ある特信者の自由意思による寄付金などによつて賄われるものであろう。そこには宗教が実際に生きている。この教徒は勤勉であり実直であるために、インド・パキスタンの各地に進出して、民衆から信頼されている。おそらくこの教徒はますます発展するであろう。

## 六、佛教者としての反省

最後に仏教についてであるが、西パキスタンやアフガニス

タンの佛教寺院跡を見るに、かつてはこの地方には数百年間にわたつて仏教が大いに栄えていたことが想像される。インドのナーランダ寺の如きは、佛教教学研究の中心として、インド各地から数千人の僧侶が來り学び、在俗の学人は一万人にも及んだとされる。これらの有名な大寺院は篤信者によって寄進された広大な土地や財産をもち、その収入によつて経済生活が維持されていた。そこには釈尊時代のような托鉢生活の必要はなかつた。従つて学侶は生活の不安がなく、学問研究に没頭することができた。

そのために大小乗の佛教は、教理学説の上では、綿密詳細に論究され、未曾有のすばらしい教學を樹立するようになつた。中期大乗を中心とするこの時代の佛教はインドのすべての宗教や哲学の中で、もつとも精彩ある卓越した教理学説を展開しているのもそのためである。

しかし佛教が専門化するに従つて、それは学問的出家佛教となり、一般民衆や在家信者には理解されず、また実際信仰には必要でないものとなつていつた。佛教は民衆と隔絶して接触することも少くなつたために、信仰の上で民衆を指導教化するという佛教本来の使命はまったく失われるに至つた。佛教が学問としては栄えても、生きた信仰としては衰えていった理由はそこにある。今日の日本の佛教学者の学問研究が注意されるべき点はここにある。今日の佛教を宗教性あ

る生きたものとするためには、学問仏教から脱却しなければならない。仏教の教學理論に対する知識は必要であるが、これが実際に活用され得ないならば、学問は有害無益のものとなるであろう。

インドやパキスタンにおける大寺院の趾を見て感ずることは右のようなものであるが、日本でも大きな伽藍が建ち緻密な学問が栄えても、仏教の宗教活動がおろそかになつては、インド仏教の轍をふむようにならないとも限らない。

それにイスラム教やシク教などを見て感することは、そこには専門の僧侶が少なく、多くは在家信者の手で奉仕的に運営されているということである。これらの宗教には仏教のような複雑な教理組織がないから、特別の専門家を必要としない面もあるであろう。イスラム教のように、砂漠地帯から起つた宗教は、厳しい自然環境の砂漠や荒野にも堪えられ、常に生命の危険にさらされつつある人々が心の慰めと支えを得られるような、命がけの信仰とならざるを得ない。そこに複雑な教理学説の必要はなく、むしろ簡潔な教えや厳格な戒律が要求される。

パキスタン、アフガニスタン、インド等の厳しい不毛地帶にはイスラム教のようなものが適するであろう。この地方の仏教がまったく亡び去った理由の一つはこの点にあるであろう。今日イスラム教が栄えている地域の多くは、赤道直下

の暑熱の地とか砂漠荒野とかいうような、生活資源に乏しく、自然環境と命がけで戦わなければならないような地方である。

これに反して、仏教が今日まで栄えている地方は、日本や韓国や台湾をはじめ、セイロンや東南アジア地域などのように、自然環境に恵まれ、生産物資の豊富なところが多い。つまり、複雑な教理やゆったりとした信仰をもつ仏教は、自然環境に恵まれた地域に適し、厳しい生活環境の中では、簡潔な信仰を説くイスラム教のようなものが適していると考えられる。

しかし仏教の中でも、早くからインドに進出していいる日蓮宗の日本山妙法寺のようなものもある。日本山では困難な環境の中にあって、辛抱強くしかも極めて敬虔な信仰によつて、四十年間一日も欠かさず、釈尊が法華経を説かれた場所とされる靈鷲山に参つて、清掃や読経の奉仕を続けている。そこでは学問や教理を問題とすることなく、ただ団扇太鼓による唱題だけで、インドの人々に深い感銘と感化を与えている。

ガンジー、ネール以来のインドの指導者たちが、仏教の教えやアショーカ王の政策をインド政府の統治の理想としていることにも、日本山の人たちの不惜生命の信仰態度が影響しているかも知れない。なんらの地位も名譽も一切の野心もなく、ひたすら法のために命がけの信仰を続けてることが、

接する人に感動を与えるにはおかなかつたものであろう。

インド独立後に、不可触賤民の間に起こった新仏教運動にしても、信者の数がインド諸地方に数百千万人にも達し、かれらに法を伝える指導者が不足しているという。妙法寺では指導者養成の大学を多宝山上に建てる計画中であるとか聞くが、指導者となって、暑い不健康な土地で、貧しい下層民とともに生活しつつ、なんらの報酬をも望まず、不惜身命の活動をすることは容易なことではないであろう。釈尊の

真精神を受けて、仏教をかれらの間に広めるためには、妙法寺の人たちのような覚悟と態度が必要である。

日本内地においても、それだけの覚悟がありさえすれば、仏教者としての真の活躍ができるであろう。中国の禅者の中にも、道元禅師、瑩山禅師をはじめ、わが国の祖師たちの中にも、そのような人びとがあつたからこそ、禅宗や宗門が今日まで発展してきたものと思われる。これを思えば、安閑として暮しているわれわれは慚死すべきである。